

JAMS 第 20 回研究大会個別研究報告

富沢寿勇

報告(1)都築一子 (NPO シニアボランティア 経験を活かす会)「ロガン・ブヌット国立公園の中・隣接地に住むブラワンの焼畑と漁業：生計向上を図りながら自然環境保全をする課題」では、サラワク州で 1990 年に成立した標記国立公園と周辺に住むブラワン社会の生業構造の変化と現状が報告された。特に彼らの慣習的土地保有地において拡大する油ヤシによって大きく変化しつつある自然環境や生物多様性をいかに保全すべきかについて代替策が提案された。このような大きな課題に対して、本報告が対象とする時間の幅や 20 件のアンケートと聞き取り調査という方法にはかなり限界があるが、パイロット・スタディとしては一定の意義も有している。

報告(2)小野真由美 (早稲田大学)「越境化するケアと日本人退職移住者：マレーシア・マイ・セカンドホーム・プログラムとメディカルツーリズムの動向から」では、マレーシアで 2002 年に開始された外国人退職者を受け入れる「マレーシア・マイ・セカンドホーム・プログラム (MM2H)」に参加し始めた日本人高齢者を主たる対象とした調査報告に基づいて、国際退職移住とヘルス・メディカルツーリズムとの接点が整理され、論じられた。特にケアの越境化の問題は、ケア労働者の国際移動のみに着目するのではなく、ケアの受け手である患者・要介護者の国際移動も同時に考察する必要があるという重要な指摘もなされた。それにしても、渋谷を

走るタクシー広告においても、マレーシア政府観光局による MM2H 関連のプロモーション活動が展開しているとは知らず、まさにグローバル化の一端を垣間見る思いがした。

報告(3)野中葉 (慶應義塾大学)「マレーシアのダクワ運動とインドネシアの大学ダアワ運動の接点 (試論)」は、1970 年代に顕在化したマレーシアの「ダクワ運動」とインドネシアの「ダアワ運動」の相互関係を、ABIM 代表となったアンワル・イブラヒムとバンドゥン工科大学サルマンモスク運動リーダーの一人であったイマドゥディン・アブドゥルラヒムとの接触史を中心に論じるものであった。両国におけるダクワ／ダアワ運動はいずれも世俗的な高等教育を受けた人々が担い手になったこと、同時期に「世俗的」な政府を批判し、イスラームを軸にした社会改革を目指したことなどの共通点があったため指摘された。些末なことかもしれないが、「ダクワ」と「ダアワ」という区別は、本来同じ音を異なるローマ字表記法で転記したものに由来すると思われ、日本語への転記においても両者を特に峻別すべき根拠が不明で気になった。

いずれにせよ、両国の運動はいうまでもなく 1970 年代以降の世界的なイスラーム復興・再生運動の大きな流れの中で位置づけ、定位されて論じられるべきものであり、さらに広域的かつ体系的な実証分析が今後野中氏によって展開されることを期待したい。